

櫛の会・句集

令和元年度発刊版

加藤 将

春

精悍な阿修羅の像や春きざす
春寒や門閉ざされし女人寺
宿の朝うすむらさきの蜆汁
淡雪や佐渡に激しき鬼太鼓
鶴喉(かくれい)の絶へし水面や春時雨
蜆汁受く合掌の異国僧
横文字の絵馬揺るる寺春の鳶

夏

夏きざす穂高の峰や河童橋
夏雲や大地のたうつ千曲川
碧落に雲刷く朱夏の箱根山
比叡山写して朱夏の琵琶湖かな
写経する善男善女梅雨晴間
釈迦牟尼の切れ長の眼や半夏雨
阿仏尼も超へし峠や夏の富士

秋

独り居の夕餉の席や扇風機
大原女(おはらめ)の頭上をかすめ夏燕
小机の古びた辞書や秋ともし
日は月に空をゆづりて旅の宿
蓮の実の揺るる古刹や鐘の音
秋麗や国旗かかげし駐在所
とりどりの秋果の香り道の駅

冬

襷(ひだ)深き富士の裾野や枯尾花
山裾は寂寞として枯かずら
手相見の貧乏揺すり冬の夜
帆船の高き帆柱月冴ゆる
鈍(にび)色の空を写して鰯の海
初競りを知らせる鐘や魚市場
大寒や火の見やぐらの多き里

小泉 寿美雄

春

春浅しほうきの先のほつれ糸
紅椿落つたまさかの白き石
縁側に日差しなかばや春障子
野も山も光ほんのり暮れの春
廃屋の草生ふ樋(とい)や春の月
指匠師の功説く妻や春の宵
僧堂の座禅修行や遅桜

夏

麦秋や越後なまりの若夫婦
夏立つやたれつややかな串団子
母の日や届く帽子に妻ポーズ
前掛けをはみ出す胡瓜妻の笑み
白南風やポスター待ちの掲示板
気まぐれの帰省に合せ切るメロン
盆休みお泊まり予約弾む声

秋

終戦日壕(ごう)より眺む青き空
函領や雲立つ朝の秋はじめ
ハイカーの伸ばす手ふるる青蜜柑
めくるめく参拝記帳薄紅葉
片言の誕生祝い秋日和
そぞろ寒夜具引きよせる雨の夜
雨音の消えし静寂や虫すだく

冬

なりゆきの家事分担や冬はじめ
立冬や参道めぐる杖の客
歳の瀬や急(せ)くこともなき老夫婦(ふたり)
函領の背光強し大西日
かまびすし児ら歳晚(さいばん)の庭掃除
冬日差海面(うなも)こうこう相模湾
寒の入り防災広報音たかし

中村 敬

春

ひとあめのひといろ添へる庭二月
築山に一斉蜂起落の臺
耕牛やカンボジアの地裏返す
モーツァルト寝そべって聴く春の牛
日溜りに春をひと飲みあくび猫
東風に乗り結婚祈願絵馬駆ける
リセットの出来ぬ人生しゃぼん玉

夏

細脰に四股踏む子らや柿若葉
絡みては風に解かるる鯉幟
あきずしま山を煙らす余花の雨
雲を掃く竹千本の青嵐
水映る金閣碎き水馬
甚平に浴衣と出合ふ夜の浜
噴水の雲くすぐれる遊園地

秋

苦味増すガム噛み続け敗戦忌
転がらぬ地球の上の西瓜かな
魚信ある竿から翔(た)てる赤とんぼ
団欒(だんらん)を包む餃子や秋の夜
父の忌を目安に閉じる秋簾
老いと言う十人十色秋深し
地下足袋のランナー行けり秋の道

冬

柁追ふ犬遠ざかる夕時雨
穂の波の上を滑るや神の旅
八ヶ岳一山隠す大根干
敷石の軒借る人や京時雨
白鳥の白より白し富士の山
書初や平和を太く愛太く
幸せの尺度それぞれ福寿草

吉澤 フミ子

春

佐保姫の梢に遊ぶ日和かな
幾筋も畑焼く煙峡の村
梅一輪咲いて狭庭の華(はな)やげり
風光る令和の御代の安らけし
目黒川龍の化身の花筏
渋滞の窓にさくらと天守閣
産土を離るる話し春愁

夏

八ヶ岳裾まで見えて子供の日
水張りし田に漣(さざなみ)の走りけり
木洩れ日の踊る参道額の花
胸元のカット涼しき乙女かな
釣人の頬過ぎゆけり青田風
山百合や田舎暮らしも捨て難し
自分史や桑の実食(は)みし幼き日

秋

信号待ち車窓より入る秋の風
盆提灯点し御魂の帰り来る
血の透ける腹を揺らすや床這う蚊
ホバリングして吾(あ)を囲む秋茜
被災地の闇を照らすや望の月
嵐去り月は円(まどか)に照らしけり
今年また友と味ふむかご飯

冬

狭庭にも足音聞こゆ竜田姫
ひと刻の華やぎ終へし山眠る
ご無沙汰の手紙に添へし紅葉かな
テロに逝く偉大な医師や星冴ゆる
クリスマス誘ふ電話は舌足らず
横顔のきりりと美^(は)しき弓始
咳^(しはぶ)けばひとりの闇のなほ深し

岡田 隆三

春

古寺やしばらくここは竹の秋
主なき庭にどっしりうかれ猫
頂の雲は斜めに春の富士
花色に裾染め上げて摩天楼
雛段の並ぶ夫婦^(めおと)の細目かな
美しく優しく膨^(ふく)る春障子
春風や船出の旗も柔らかく

夏

ふんわりと万物浮かす今朝の夏
海のはて雲の日差しも夏の色
潮の香を集めて皐月船デッキ
五月晴古稀の祝ひの船出かな
夏日和古稀の祝いの船出かな
皿に盛る色香も淡^(あわ)し夏料理
海という波を従へ夏の船

秋

刻む名の遺族のはなし盆の暮
神ませばまこと美し雲の峰
路地裏にテキーウかほるソンプレロ
古き良き暮らしに戻り秋なすび
医者笑ふ脂肪肝あり食の秋
ふらりふら見知らぬ家の吊し柿
ホルムズの護衛艦隊夕月夜

冬

見えぬ目や海はさやかに波寄せて
湯豆腐や夫婦の中の浮き沈み
いつからが年寄りなるやとろろ汁
いさかいも解けて夕餉のたらば蟹
対局の気魂ぴりぴり冬羽織
喰うと言う愉快や老いのたらば蟹
星一つ流れて寒し船の窓

<編集後記>

発足以来十九年目になりました。
その間、人の出入りが多く、今年度からは要の石井 謙 先輩が欠席になり、五名の会員になって仕舞いました。お互い、物忘れが多い年頃になりましたが、お菓子を食べつつ、雑談も交えて、季語の勉強、俳句の勉強をしています。
是非とも、新規の会員を集めたいものです。

(監事:中村)

以下に櫂の会のメンバーの写真をまとめました。
懐かしい、顔の方も見られます。
最近では、岡田さんが参加しています。
岡田さんは去年世界一周の旅をしました。

